

Wolfologyに関する授業研究

——受講生は先入観を如何に変えて行ったか——

A Study of the Effect of Lectures about Life of the Wolf:
How Students Change Their Prejudices

児童学科

Dept. of Child Studies

福本 俊

Shun Fukumoto

抄 録 本学の通信教育課程の学生を対象にして、オオカミに対する偏見が、現実のオオカミの暮らしに関するドキュメントに接することによって、如何に変容するかを追跡した。1週間の演習とグループディスカッションを通じて受講生たちは、従来のオオカミに対するネガティブなイメージを、よりポジティブなイメージへと大きく変容させていた。最も大きく変わった印象のベスト3を挙げれば、敵対的な印象から友好的な印象に、悪い印象から良い印象に、不誠実な印象から誠実な印象に、と言うものであった。オオカミに関する新しい事実に触れたときに、一人一人の受講生が、どのように印象を変えて行ったかについて、丁寧に追跡することが次なる課題である。

キーワード：オオカミ学、先入観、情報提示、意味微分法、印象の変容

Abstract This article reports the changing process of the prejudice towards wolves on the part of students in the Correspondence Course of JWU. The students were presented with some documents about the real life of the wolf. They changed their impressions about the wolf through a one-week summer seminar and group discussions. The direction of the changes were from negative to positive. The best 3 of the changes were from hostile to friendly, from bad to good, and from insincere to sincere. To follow carefully the individual process of change is the next step of this study.

Keywords : wolfology, prejudice, information presentation, SD method, impression change

1. 問題

筆者はモノ・コトの裡（うち）の変わらない様（相と言っても良い）・変わりにくい部分に魅かれている。多分これは筆者自身の“変わり行くことへの不安”に深く根付いたものであろう。変わらない様の典型は「始まり」である。そこから筆者にとって「モノ・コトの始まり」もまた研究的関心の一つである。一昨年度の本誌及び大学院紀要に発表した「ROOTOLOGY（根源学）」は、このモノ・コトの始まりへの関心の具体化であった。一昨年度の本誌のテーマは「先入観」、大学院のそれは「性格特性」であったが、「初めての記憶」もまた根源学の中の

主要なテーマである。ところで、「変わらない様」の中での代表的なテーマである「偏見・先入観」を対象とする研究を称して「DISCRIMINOLOGY（偏見学）」と筆者は呼んでいる。偏見・先入観は簡単に形成され、そして容易には変化しないものである。なぜならば偏見を抱くことが当人にとって最も簡単な情報処理の仕方であり、大変に楽であるからである。「あの人はこういう人だ」と決め付けることができるればそれは非常に楽である。余計な情報を取り入れて自分の確信を態々変更するなどと言う煩雑な作業から解放されるからである。私共は様々の偏見・先入観を作り上げている。そしてそれらの観方・感じ方は言わば「肉体化」されている。「いい

め」はこの偏見・先入観の為せる業の典型である。決め付ける事ができるから、迷うことなくいじめることができる。部落民・アイヌ・黒人・有色人種など少数者・少数民族或いは肌合いの違う人々への偏見、女性・障害者など弱者への偏見、自らとは全く異質な存在である鬼・魔女への偏見などは、筆者の DISCRIMINOLOGY (偏見学) の対象である。今回取り上げた「WOLFOLOGY (おおかみ学)」も偏見学の真ん中に位置している。

2. WOLFOLOGY とは

端的に表現すれば、「not scapegoat, but scape-wolf」である。SCAPEGOATとは、身代わり・犠牲《聖書》贖罪の山羊：昔ユダヤで贖罪日に人々の罪を負わされて荒野に放たれた山羊（旧約聖書レビ記16章）であり、キリストの原型とされる。荒野に放たれた山羊はオオカミなどの肉食獣に食べられたと考えられる。これに対して筆者は SCAPEWOLF と言う概念を提唱している（日本心理学会第46回大会発表，1982年）。私共人間は自らの恐れ・憎しみ・不安・悲しみなどを全部オオカミの背中に背負わせているのであろう、との考えである。

元来我が国を始めとする農耕民族にあってはオオカミはむしろ農業を護る動物として大切にされてきた。更には東京の御岳神社のようにオオカミが守護神として祭られていた。狩猟も生活の大きな支えとしてきたと思われるアイヌの人々にあっては、オオカミは「吼える神」として敵対するものとしてよりは寧ろ狩の巧みさから神と崇められていた。しかし、狩猟採取を生活の手段としていた多くの民族は自らの獲物がオオカミと競合することによってオオカミを敵対するもの・厄介なものとして見做してきた。そしてお定まりのように自分たちを護るためにオオカミに対する偏見—オオカミは残忍な悪者—を作り上げて行った。それに伴って、その偏見を強めるような物語もまた産み出されて行った。北海道にキリスト教の宣教師が来て先ず初めに行った仕事は「害獣オオカミ」を撲滅するために全道にストリキニーネ入りの毒饅頭を撒いたことであつた。これによりアイヌからは神と尊敬されていたエゾオオカミは全滅したのであつた。その付けは今日の北海道経済を酷く悩ましている。オオカミを頂点とする自然の生態系が狂った結果、必要以上にエゾ鹿などが増え、農林業は毎年膨大な被害に見舞われている。今日エコが

叫ばれているが、生態学的に言って「最も自然らしい自然」はオオカミを頂点とした生態系である。ライオンでも象でもない。我々がこれからも地球に暮らさして貰えるために自然を復活させることは基本的な条件である。そのためには様々の偏見・先入観から解き放たれることもまた必要である。事実、北海道上川郡標茶虹別で20頭近くの森林オオカミと極北オオカミを飼い、やがては全道にオオカミを頂点とした自然を復活させようとの桑原氏の気の永い取り組みが地道に行われている。氏は自ら運営する「ネーチャースクール」において我々がオオカミについての正しい知識を持つようと日夜奮闘しているのである。

3. 目的

受講生の「おおかみ」に対するネガティブなイメージが一週間の授業を通じてどのようにポジティブなイメージに変化するか、その過程を明らかにする。

4. 方法

(1) 対象者

日本女子大学通信教育課程・福本担当「児童学演習」受講者35名

(2) 授業期間

2009年8月17日（月）から22日（土）9：00～12：30

(3) 提示教材

1) テキスト

『オオカミよ、なげくな』

（ファーレイ・モウワット著小原・根津訳，1977，紀伊国屋書店）（＊1）

2) 視覚教材

VTR「野生発見の旅」NHK1997. 5. 3（＊2）；

「昼時日本列島」NHK2000. 8. 12（＊3）；

「虹別桑原牧場」福本撮影2002. 8. 14（＊4）

3) 印刷教材

朝日新聞2002. 7. 1

「オオカミ伝説山里に息づく

—奥多摩に幻の姿追う」（＊5）；

Piagetの「自己中心性」

（第一法規「現代子ども大百科」p.0299）；

正岡子規「病床六尺」

(中央公論社「日本の文学」15)；

フランス科学犯罪捜査学校の標語

「眼は、それが捜し求めているもの以外は見る
ことができない。捜し求めているものは、も
とと心の中にあったものでしかない。」

(4) 授業運営

1日当たり40ページを目途に、テキストを5回分に
分ける。原則として前日にそのテキスト部分を渡
して読んでおいてもらう。当日はその日の「学習の
うと」を各自に手渡し、読んでおいた内容を基に
「のうと」を作成する。その後、各自の「学習のう
と」を持ち寄り、グループに分かれて討議を行う。
その後再度集合してグループ間の発表を行う。グル
ープ討議の時間に前日提出の「学習のうと」を各自
に返却する。従って各自の手元に「学習のうと」の
ファイルが徐々に作られていくという仕組みである。
オオカミに対する印象・態度の変容の過程を詳
しく追跡するために前もって通読される事態を避け
た。たまたま、この本が絶版であったこと、また、
この本を以前に読んだことがある受講生が皆無であ
ったことは、今回の研究目的上好都合であった。

1) グループ分け

受講生名簿の番号順に1～7の番号を振ってい
く。これによって通信教育課程入学までの経歴・年
齢などにおいて等質化された7グループが構成され
た。1グループ5名である。

2) オオカミに関するSD法

初日と最終日に行った評定法である。初日の授業
開始冒頭「おおかみ」を刺戟語とした46の形容
詞・形容動詞対（以後形容詞対）に対する7段階評
定を依頼し、従来までのオオカミに対するイメージ
を披瀝してもらった。形容詞対はオスグッド
(Osgood, C.E.) の提案する意味空間の4つの評価基
準、即ち、論理的評価（正しい—不正な；よい—わ
るい；すぐれた—おとった；立派な—ひどい；役立
つ—役立たぬ）、感情的評価（陽気な—陰気な；静
かな—騒がしい；おおらかな—卑屈な；理性的な—
感情的な；誠実な—不誠実な）、力動性評価（すば
やい—のろい；はやい—おそい；鋭い—鈍い；若い
—老いた；勇敢な—臆病な）、巨大性評価（大きい
—小さい；長い—短い；強い—弱い；深い—浅い）
に基づいたものである。最終日、オオカミに関する

「事実」（良いイメージが圧倒的に多い）が描かれて
いるテキストや補助教材を経験した後で、同一の
SD法を行った。両者の差が1週間の授業での学び
の効果とすることができよう。

3) 学習のうと

B4版仕立てのシート。1. 疑問点など、2. オオ
カミについての新しい知識など、3. オオカミにつ
いて変化した印象など、の3つの部分に仕切られて
いる。

4) 従来までのオオカミに関するイメージなどの調 査

「09. 08. 17現在のオオカミに関するあなたご自身
の感想・印象について述べてください。」とした、
B4版仕立ての質問紙。自由記述を依頼した。（＊6）

5) 本授業・児童学演習の評価テスト

最終日に施行。課題1. テキスト・プリント・
VTRなどから「あなたが学んだこと」3点以内に簡
潔に述べてください。課題2. 今回の演習を通じて
「あなたの裡（うち）にある偏見について気付かさ
れたこと」について述べてください。

(5) 授業日程

1) 2009年8月17日（月）

刺戟語「おおかみ」のSD法；テキストに関する
グループ学習（p.7～p.39）；「学習のうと」の作
成・提出

2) 2009年8月18日（火）

「2009. 8. 17現在のオオカミに関する感想・印
象」；テキストに関するグループ学習（p.40～
p.81）；「学習のうと」の作成・提出

3) 2009年8月19日（水）

テキストに関するグループ学習（p.82～
p.123）；視覚教材上映VTR「野生発見の旅」
NHK1997. 5. 3, 「昼時日本列島」NHK2000. 8. 12,
「虹別桑原牧場」福本撮影2002. 8. 14；「学習のう
と」の作成・提出

4) 2009年8月20日（木）

テキストに関するグループ学習（p.124～
p.161）；印刷教材提示 朝日新聞2002. 7. 1「オオ
カミ伝説山里に息づく—奥多摩に幻の姿追う」；
「学習のうと」の作成・提出

5) 2009年8月21日（金）

テキストに関するグループ学習（p.162～
p.206）；「学習のうと」の作成・提出

6) 2009年8月22日(土)

「おおかみ」についての2回目のSD法；プリント教材—Piagetの「自己中心性」・正岡子規「病床六尺」・フランス科学犯罪捜査学校の標語についてのグループ学習；「学習のうと」の作成・提出（＊7）

(6) 授業日程ごとのテキストの概要

第1日目：8月17日

ナマズにひかれて (p.7～p.17)：初めはナチュラルリスト、やがては生物学者となる著者の人生の切っ掛けとなったナマズにまつわる事件と、その後の著者の大学での学び。カナダ政府の命を受けオオカミの実態調査のために極北の地バーレンランド（荒地）に発つに至った経緯。

オオカミジュース (p.18～p.25)：空軍の輸送機でチャーチルまで。そこでバーレンランドまで著者を運んでくれるパイロットを探しながら、それぞれがオオカミの専門家を自認する色々な人からオオカミについての情報を収集する。エスキモーの妊婦は襲わない（そもそもオオカミは人を襲わない：福本註）・四年ごとに脱皮を起こす特殊な病気に罹る（このようなことは聞いた事がない：福本註）・アメリカの空軍基地ができてからオオカミの数がやたらと増えた（爆音・森林の伐採などで餌が少なくなった結果、基地の余り物を頼ってオオカミが出没する可能性は考えられる：福本註）、など従来の科学文献には載っていないものが多い。オオカミジュースとはこのオオカミ気違いなら誰でも呑むものでヘラジカ印のビールに基地の兵隊から手に入れた不凍液用アルコールをたっぷり入れたものである。

オオカミを求めて (p.26～p.31)：五月末まで待った結果、1938年製の空軍練習機を操縦する元英国空軍パイロットと出会い、オオカミを求めて出発。積載した荷物が重いために三百フィート以下と言う低空飛行の末、パイロットによればチャーチル北西三百マイル辺りと言う凍った湖に漂着。さてオオカミは。

極北からの通信 (p.32～p.39)：湖上に山積みの荷物は運べないので、そのままそこを基地とする。場所はバーレンランドの真っ只中の模様。「肉食獣管理局」と連絡を取ろうとするも携帯した送信機は二十マイル以上の範囲には使えない代物でお手上げ。そうこうしているうちに、声などから推測する

と四百に近いと思われるオオカミがやってくる模様。慌ててカヌーの下に潜り込む著者。カヌーの端と氷との隙間からの観察の後、カヌーを持ち上げた末に見たものは、一人のエスキモーの青年と十四頭の強そうなエスキモー犬であった。

第2日目：8月18日

出会い (p.40～p.48)：エスキモーと白人の混血青年の罨獵師マイクとの出会い。数マイル先の彼の小屋が著者の常設基地となる。マイクは著者と著者所有の諸機材に対し薄気味悪がって小屋から飛び出していく。オオカミと出会う手筈がわからないまま、兎も角小屋の周囲から調べることにする。小屋の周りには夥しいカリブーの骨が敷き詰められた状態。小屋から離れるに連れて骨が少なくなっていく（結局カリブーは人間が食べていたらしい）。夜寝ていると子犬の鳴くような声。マイクの犬に違いないと思い、その声の主を辿っていくと、その声の主はオオカミであった。予期せぬオオカミとの出会い。両者睨み合いのあと、低く飛ぶようにオオカミはあっという間に消え去った。

巣穴発見 (p.49～p.57)：寝ようと思ってもさっき遭遇したオオカミの姿が蘇ってくる。幅広く白い首周りの毛・短くびんと立った耳・黄褐色の目・灰色の口辺部・がっしりした頭・飛ぶような動き・瘦せて筋張った身のこなし・子馬ほどもある全体の印象・死につながる力を感じさせる印象。翌朝、昨日遭遇した地点まで辿ることにする。ライフルなど重装備で出掛ける。遥かかなたで二匹のじゃれあうオオカミ。鬼ごっこをしながら著者の近くに。穴の窪みで身を潜める著者。雌が巣穴に入る。思わず丘の上を駆ける著者。雄のオオカミに見つけられるがオオカミは著者を完全に無視して巣穴の上で悠然と昼寝をし始める。自分の姿を見せたためにオオカミに逃げられるのではと心配したが、その心配がなくなりほっとする著者。

観察開始 (p.58～p.65)：身の危険をそれ程感じなかった著者は、武器の代わりに高性能の望遠鏡と三脚だけを持ってオオカミのところに行く。一番高い岩山の後ろに望遠鏡を据え、対物レンズを頂越しに覗かせ自分の姿を見えなくしながら辛抱強く狼たちが現れるのを待ち続ける。午後二時諦めて小用を足そうと後ろを振り向くと、番のオオカミがゆったりと座っている。観察されていたのは自分であったこと。背後から襲おうと思えばいつでも可能であっ

たのに襲ってこなかったこと。この二点で心身ともに緊張し過ぎ、小屋に一時退却する著者。人間であることそれも徹底的な技術的な訓練を受けた人間としてのプライドが否定された著者は、それを挽回すべく翌日改めて巣穴に向かう。巣穴付近では四匹の子どもオオカミがレスリング遊び。太ってちょこんとした耳・狐のような顔・カボチャのように丸い胴体・短く弓なりの足・小さいがピンと立てた尾など、オオカミとかけ離れた様に、初めは何んだか判らなかった著者。中の一匹がよたよたと著者の方にやって来る。そのときに警告を発する親オオカミの遠吠え。子どもたちは巣穴の中に。親オオカミを見るためにバランスを崩し山の斜面をずり落ちもがく著者。それを三匹のオオカミがロイヤルボックスの観客の様にきちんとならんで愉快そうな表情でこちらを見ている。またもや相手に軍配。ぼろぼろの神経とずたずたの自尊心を抱えながら引き上げる著者。これまで作られてきた「残忍な殺し屋」のイメージと一晩中葛藤する著者。その結果、著者は虚心にオオカミの世界に入り・憶測ではなく現実のオオカミを観ることを決意する。

なわばり (p.66～p.71) : 完全にオオカミの側に立って観察することを決意した著者。武器は一切持たずにオオカミの平穏な生活をかき乱さない範囲で、できるだけオオカミの近くに小さなテントを張る。大きな望遠鏡はテントの入り口に据え、寝袋から出ないでも昼夜巣を見張れるようにした。オオカミは完全に著者を無視する。西の狩猟地への行きかえりに著者のテントの脇を殆んど無視しながら通い続ける。解ったことは放浪することは無く、極めて明確な境界を持つ大不動産の中に定住する生き物であると言う事であった。無視された著者は自分の存在を主張するために、お茶をがぶがぶ飲みながら、テントの周りに「マーキング」をしてみた。いつもは無視して通り過ぎていたオオカミが著者のマークに出くわしたとき当惑した様子。じっと考えてから一つ一つ自分のマークで著者のマークを消し、自分の地所を元通りに直して巣に悠然と戻って行ったのであった。

オオカミ式昼寝 (p.72～p.81) : 著者の存在が認められると著者の領地は公認された。身の危険が無いことがわかってきたので、オオカミ研究に全力が注げるようになった。初めに解ったことは彼らの規則正しい生活ぶり。夕方早く雄が狩に出掛ける。雌

は巣に入り子育てに携わる。昼間は昼寝をするがそれが独特のオオカミ式の昼寝。グルグル回って丸くなって寝入る。5分から10分の間。狩猟の余剰分の食料の隠し場所は巣から半マイルのところ。オオカミに親しむにつれて各個体の個性が明らかになってくる。主人の雄はジョージ。妻はアンジェリン。それと子どもたちの相手役のアルバート叔父さん。母親は充分に子どもの相手をするが、これ以上付き合えない場合は、独特の叫びを上げてアルバートを呼び、後は任せる。アルバートは徹底的に子どもたちと付き合い、子どもたちは疲れきって寝始める。チームワークの見事さである。

第3日目：8月19日

食べ物 (p.82～p.91) : 著者の手元にある情報は、カリブーを絶滅させているのはオオカミであるというもので、これらはカナダ政府がハンター・罾猟師・商売人から得た情報である。さて今や6月末、カリブーは夏を過ごす為に北方の荒野を目指して行ってしまった。ではオオカミは何を食べているのか。答えはネズミであった。アンジェリンが実際に獲って見せてくれた。2, 30匹のネズミを飲み込み、巣穴に帰ってから、半ば消化したものを子どもたちのために戻す。マイクの親類のオーテクもオオカミはネズミをたべると教えてくれた。著者は150箇所にもネズミ捕りを仕掛けたが、ジョージも同じところでネズミを獲りに出掛けてきた。不幸にもジョージがその罾に足を噛まれてしまったが、これとてもオオカミがネズミを食べていることを示す出来事であろうと考えられる。

ネズミ料理 (p.92～p.99) : あのカリブーの殺戮者であるオオカミが、よりによって、ちっぽけなネズミでお腹を満たしていたとは、どうもしくない。そのことを政府に報告しても、一笑に付されてしまうに違いない。ではどうすれば信用してもらえるのだろうか。著者は考えた末、自分自身が実験台になることにした。即ち、オオカミと同様に、自分もネズミでお腹を満たし、その結果、自分の健康状態を見極めることである。ネズミのクリーム煮を考案した。初めは内臓を捨てていたが、どうも油っぽいものが食べたくなった。そこで内臓も全部使うことにした。その結果は大成功であった。かくしてオオカミの食料はネズミであることが立証されたのである。著者がオーテクに自分の使命を話すと、大変に関心を示してくれた。というのも、オーテク

自身の個人的トーテムつまり救いの霊がアマロク即ちオオカミであったからである。五歳のときに有名なシャーマンであった彼の父親によって、24時間オオカミの巣穴の中に置き去りにされて、オオカミの子どもたちと遊んできたとのことであった。このような話から、いよいよ著者のオオカミに対する確たる見方が作られて来るのであった。

エスキモー神話 (p.100～p.106) : オークはオオカミの食生活について色々教えてくれた。ネズミ以外にもハタリス・ジリス・カワマス科の魚・ホッキョクカジカなども食べている。オオカミとカリブーの関係を明快に示す神話をオークが話してくれた。それによれば、オオカミとカリブーは一体である。オオカミは弱い病弱なカリブーを食べることによってカリブーの群れ自体を強くしていると言う訳である。太った美味しいカリブーを殺すのは自分たち罾猟師であるとマイクが言う。14匹の犬を養うために一週間で2, 3頭は射撃で殺す。だから1年間で2, 3百頭以上。他の猟師なら誰でもそうしている、とマイク。オタワでの問い合わせ調査によれば、罾猟師も商人も年に殺すカリブーは1, 2頭であると言う。この地域には、ざっと1, 800人の罾猟師が居る。猟師の数と、殺すカリブーの数を半分にして掛け合わせても、毎年十一万二千頭のカリブーが殺されている勘定になる!! このような伝聞証拠を得ながら、それでも著者は自分自身による直接的な証拠を得ようと決心するのであった。

オオカミの通訳 (p.107～p.115) : オークはオオカミの言葉がわかる。オオカミは実に多種の言葉を「話す」。遠吠え・悲しげな声・震え声・くんくん鳴く声・鼻声・うなり声・きゅんと鳴く声・吠え声などである。著者には聞こえないオオカミのコミュニケーションもオークは聴き取れるようである。例えば「カリブーがやがてやって来る」とか「エスキモーが数人やって来る」とかである。著者はそんなことには騙されない、と思っているが結局そのような状況が訪れるのである。どうやら彼にはオオカミ語が解る様である。

引越し (p.116～p.123) : オオカミの子どもたちが「地下の穴の中で過ごすには大きくなりすぎたが、といって両親について行くにはまだ若すぎる」状態になったとき、元の巣から半マイルほどの溪谷に引越しをした。アンジェリンが一匹ずつ啜えて移動。雄たちがそれを見ながら見張りをしている。新しい

場所は小さな流れがあり、野ネズミが住む草のある沼地もあり、子どもたちが狩の最初の勉強をするのにうってつけの場所であった。オークから次のような話を聞いた。オオカミは犬よりも長生きである。また孤児になると別のオオカミがその子たちを引き取って育てること。人間の子どもは無力なので、オオカミに育てられることは無理だが、オオカミの子どもを人間が育てることは可能で、そのような事例を二つは知っているというのである。

第4日目：8月20日

エスキモー犬との恋愛 (p.124～p.132) : 夏になりカリブーの群れが南下して戻ってきたので、マイクもエスキモー犬と一緒に帰って来た。ハスキー犬の雌は一年中発情している。著者の知りたいことの中で、オオカミの性生活があるが、オオカミの交尾期間は三ヶ月しかなく、良いチャンスに恵まれていない。そこで雌のハスキー犬のコオアとアルバートを近づけた。首尾は上々であった。初めはコオアをワイヤーにつなげていたが、オークがマイクに勧めてコオアを放してやった。結果は上々。二人は自分たちの世界に没入していた。数日後コオアが元の犬の鎖のところに戻って来ていたのである。アルバートの吠え声は今や円熟した落ち着いた響きがあった。その満ち足りた声をやっかんて歯軋りする著者ではあった。

母子の情愛 (p.133～p.137) : 4匹の子どもたちも段々大きくなっていった。体長4, 50センチほど。元気に遊んでいる。アンジェリンが戻ってくる。胃の中のものを戻して、子どもたちの朝食の始まり。食後ののんびりとした時間が過ぎる。突如著者のオナラが溪谷に轟く。母親オオカミがその音の源を辿って、著者の近くに。オナラが出続けてしまう著者。さも軽蔑したような表情で子どもを先にしながら巣の中に消えていくアンジェリンであった。

遊びと訪問者 (p.138～p.145) : ぐっすり眠っているアルバートにジョージが不意打ちをかける。その後二人で組んず解れつの追跡ごっこ。そこにアンジェリンも参加。明らかに遊んでいる。ある夜アンジェリンが留守番をしていると、見慣れない2匹のオオカミが訪問してくる。初めは用心していたアンジェリン。段々打ち解けてくる。挨拶を交わす3匹。見慣れぬ1匹の方が子どもたちのいる穴の中に入る。20分程で2匹は去っていく。オークの言うには、オオカミも人間と同じように訪問しあうという。

またマイクが言うに、その2匹のオオカミはアンジェリンの母親と妹に違いない。

病気のオオカミ (p.146～p.153)：7月中旬になり、著者は本来の使命を果たすべくキャンプを取り払い、カリブーの群れを追ってオーテクと共に長旅に立つ。それまでの調査（管轄当局が獣猟師などから聞き出したもの）でオオカミの数は三万頭であるが、著者の計算によれば三千頭くらいである。カリブーの数が減っている場合は、一時に産む子どもの数が少なくなるような仕組みがある。さてエサが取れなくなると潜伏していた狂犬病のビールスが飢えた狐の間に広がり、それがオオカミにも移ってくると言う仕組み。狂犬病に罹ると凶暴になるというよりは、危険を感じることができなくなる。従って自動車や列車に突っ込むなど無謀な振る舞いに陥ることになる。ところがそれを「攻撃」と感じた人間によって、凄惨な殺戮者のイメージが作り上げられる。凍った平野を逃げ惑うロシア人のトロイカがオオカミの襲撃に押しつぶされたなどの作り話が広まるのである。付近一帯を軍隊を動員してのオオカミ狩りをして、オオカミは捕まらず、ハスキー犬やアメリカの兵士と帰宅の遅かったインディアンなどが自警団のせいで死傷する始末である。

カリブーを襲う (p.154～p.161)：初めに断っておくが、カリブーを襲ったのは著者である。カリブーの群れに遭遇しても、一向にオオカミはカリブーを襲わない。カリブーの方もオオカミが側に来ても一向に平気で草を食んでいる。オオカミもカリブー自身もカリブーの方が足が速いことを知っている。子どもも健康ならばオオカミよりも速い。一向に襲い掛からない事に業を煮やした著者は、たまたま日光浴をしていて全裸であったが、それを忘れて、カリブーの群れの中に飛び込む。「狩はこのようにやるのだ」とオオカミに教えるつもりで。オオカミには全然反応しなかったカリブーが、著者の異様な姿にパニックを起こした。オオカミは食べる必要が無い場合は狩をしないし、仕留めた餌は余すところなくきれいに食べ尽くす。無駄な殺生はしないのであった。

第5日目：8月21日

狩のやり方 (p.162～p.170)：色々な意味で弱い個体を選別するような攻撃を行う。何頭かのオオカミが弱い個体を群れから離して包囲するやり方。またリレー方式で別のオオカミが待ち伏せをしている

ところに別のオオカミが追い込むような方式も見られる。オオカミは無駄なことはしない。「カリブーはオオカミの餌になるがカリブーを強くしているのはオオカミ」である。オオカミがすっかり食べ尽くしたカリブーの残骸をみると何らかの疾病が認められることが多い。早晩死ぬ運命にあったのである。

子どもの学習 (p.171～p.178)：前にも書かれていたように、お腹が空いていない時には目の前に美味しそうなカリブーが居たとしても、オオカミは襲うことはしない。カリブーもそのことを知っている。オオカミが居たとしても悠然としている。午後の昼寝のときにジョージはアンジェリンを誘って子どもたちの狩の練習を計画したようである。著者も昼寝をやめてオオカミを探していると4匹の大人のオオカミが稜線に現れた。ジョージが子どもたちの見張りをしている間に、3匹のオオカミはカリブーの群れの中を走り回りカリブーの群れを挟み撃ちにしようとする陣形を敷いたりした。次に子どもたちを交えて12頭の雌と7頭の子どもからなる一群に的を絞って、追いかけた。カリブーがスピードを上げて走り始める。子どもオオカミもそれを追いかけて群れの中に見えなくなった。やがて戻ってくる子どもオオカミ。やはり追いつくのは無理であった。へとへとになって戻ってくる狼たち。心地よい昼寝が待っていたのであった。これが子どもたちへの狩の学習であった。

糞の科学 (p.179～p.187)：段々と帰国の時が迫ってきた著者には、幾つかの遣り残した仕事があった。その中の一つが「植生」の調査。これは3つの部分に分かれる (1) この地方のあらゆる植物の収集 (2) それらの植物の占める割合「生育密度」の割り出し (3) 植物の栄養価の分析。著者にとって幸せなことに (1) (2) の途方も無い大変な作業で使用する機器をオーテクのせいで紛失してしまった（実は著者がそのように仕向けた結果なのだが）ことから、これも大変な別の仕事であるオオカミの糞の分析をすることになる。二つのバケツに水を満たし、それまでに収集しておいた大量のオオカミの糞をその中に浸す。毒ガスマスクをかぶり、ゆっくりとメスで糞を刻みながらの作業。熱中している著者の周りに、いつの間にかやってきていた十数人のエスキモーたち。異様な著者の様子に興味と恐怖を抱いた。マスクをしたまま挨拶したのだから一層彼らは驚く。著者はエスキモーをもてなすために、お

茶の用意をするが、糞の浸してあったバケツで水を汲みお茶を沸かしたものだから、いつの間にか誰も居なくなってしまう。さて糞の中身は次のようであった。糞のほぼ48%はげっ歯類の遺骸で、大部分は門歯と毛であった。カリブーの骨と毛。二三の鳥の羽毛。船員の服の真鍮のボタン。まさか船員をオオカミが食べたわけでもあるまい。あっても不思議ではないのに、カナダの極北では人間を殺したオオカミの公式な報告はないのである。

オオカミを殺せ (p.188～p.195) : 十月の末、寒風の吹きさぶ平原に冬がやってくるとカリブーはツンドラに背中を向けて森の世界に向かう。十一月初旬から四月までオオカミとカリブーは寒帯林を通過して一緒に移動する。オオカミは冬には、はっきりとした縄張りを持たないようで、二つか三つの群れが一つの群れになり、また分かれていくことも良くあるようだ。森の中ではオオカミは色々な障害に会う。例えば狐獲りの罠。オオカミがこれにかかると罠は二度と使えなくなるまで壊されてしまう。そのような事からオオカミには賞金がつく。オオカミは罠と毒ストリキニーネによって殺される。その他の方法もある。それは飛行機で追い回し散弾銃で仕留めるもの。オオカミによって殺されたとされるカリブーの数は色々と報告されているが、人間によって殺されたオオカミの数は話題にもさえない。オオカミについては尾鰭がつき、偏見は肥大していく。初冬のある日、商人が大変な剣幕で著者のところに来る。「湖の氷の上でオオカミに殺されたカリブーが五十頭もいるぞ。」著者が駆けつけると、それは銃で撃たれたカリブーの死体であった。全部で二十三頭。その内の三頭の中の二頭は雄で頭がなく、もう一頭は若い妊娠した雌で後半身がそっくりなかった。2年前にカナダの州政府観光局はアメリカの金持ちのハンターを誘致するために、カリブー狩の「サファリ」計画を立てた。一回千ドルで最高級のカリブーの角一そろいが保証された。飛行機を旋回させてカリブーの群れを湖の真ん中に追い込み、機上からハンターが「立派なトロフィー (角)」を次々と狙い撃ちする。その中から最高の角が選ばれ、後は捨て去られる。契約に「一頭だけ」とあるからである。著者は関係当局に事件の顛末を報告したが、回答はない。ただ州政府はその後数週間してオオカミの賞金を上げて二十ドルにただけであった。

オオカミよ、なげくな (p.196～p.201) : ノルウ

エイの氷上飛行機が著者を捜しに来てくれたことによって帰れる目処がついた。これは実はチャーチルで広まっていたデマが切っ掛けで、役所が著者を捜し当てた全くの偶然であった。そのデマは著者は北極のロシアの浮遊基地にスパイとして派遣された諜報機関員だというものである。もう帰る日まで時間的な余裕が無い。最後の仕事、即ち、オオカミの巣穴の構造などの調査である。ノルウェイ機がわざと低空飛行をしてくれたことによってオオカミは別のところに退避している。その不在に巣穴を訪れた。暗い巣穴を懐中電灯のみ携帯して探っていく著者。巣穴の奥のほうを電灯で照らす著者。その薄明かりに浮かぶ4つの目。アンジェリンと一匹の子どもオオカミは、うなりもせず、ひっそりと壁に身体を寄せているのみ。恐れ戦く著者。銃を持っていたら発射したかも知れない。汗をかきながら静かに静かに穴の入り口に残ろじさりする著者。出口から出てほったしたとき、自分がおびえたことが悔しくなる。自分の人間としてのエゴをさらけ出させてくれた獣に対する悔しさを味わう。更に、飛行機の爆音をさけて棲家の奥にへばりついてたアンジェリンと子どもに対する恥づかしさ。東の方でやや頼り気のないジョージの叫びが居なくなった家族を求めて荒野にこだましている。この声は著者にとっては「失われた世界」を告げる声。「著者が垣間見て入りかけた世界…ついに自らはじき出された世界を呼ぶ」声であった。

エピソード (p.202) : 1959年の五月はじめ、カナダ野生生物局から派遣された捕食動物調節専門員の一人が、著者のかつてのキャンプ地である狼屋湾に着陸。しばらく止まり、狼の存在を確認後、棲家の近くに青酸の「狼殺し」を幾つか置いた。また、ストリキニーネの餌もいくつかばら撒いた。結果はどうか解らない。

訳者あとがき (p.203～p.206)

5. 結果・考察

表1は46の形容詞対に関する初日と最終日の評価結果である。得点は左端から1点、右端が7点の7段階評定である。統計的処理としては2日に関する平均値の差の検定を行った。その結果46項目の中の約72%に当たる33項目で危険率5%以下の大きな有意差が認められた。33項目の中の25項目が有意水準0.000であった。今回は演習と言う授業形

表1 評定値の平均値の差の検定

評定項目対	1 回目	2 回目	差	危険率
40. 友好的な — 敵対的な	5.14	2.03	3.11	0.000
17. よい — わるい	4.69	1.63	3.06	0.000
28. 誠実な — 不誠実な	3.94	1.26	2.69	0.000
31. 暖かい — 冷たい	4.46	1.83	2.63	0.000
18. 卑屈な — おおらかな	3.49	6.00	− 2.51	0.000
42. 情け深い — 残忍な	4.50	2.00	2.50	0.000
02. 厳しい — 優しい	3.09	5.57	− 2.49	0.000
24. 立派な — ひどい	3.93	1.54	2.39	0.000
37. かわいい — 憎らしい	4.43	2.14	2.29	0.000
11. 正しい — 不正な	3.93	1.74	2.19	0.000
25. 理性的な — 感情的な	3.73	1.57	2.16	0.000
45. 丸い — 角のある	5.00	2.89	2.11	0.000
27. 役立つ — 役立たぬ	3.73	1.69	2.04	0.000
46. 安らかな — 不安な	4.43	2.40	2.03	0.000
43. せっかちな — のんびりした	3.20	5.06	− 1.86	0.000
30. 不真面目な — 真面目な	4.27	6.06	− 1.79	0.000
06. 明るい — 暗い	4.40	2.86	1.54	0.000
09. 陽気な — 陰気な	4.50	3.06	1.44	0.001
34. 気持ち悪い — 気持ち良い	3.79	5.21	− 1.41	0.000
35. 頼りない — 頼もしい	5.00	6.40	− 1.40	0.000
44. きちんとした — だらしない	3.54	2.20	1.34	0.000
29. 深い — 浅い	3.15	1.82	1.32	0.000
01. 物覚えのよい — 忘れっぽい	2.57	1.31	1.26	0.000
21. すぐれた — おとった	2.53	1.29	1.24	0.000
41. 軽率な — 慎重な	5.11	6.26	− 1.14	0.000
39. 不注意な — 注意深い	5.59	6.51	− 0.93	0.001
19. 臆病な — 勇敢な	4.74	5.54	− 0.80	0.021
32. こまかい — 大まかな	3.89	3.11	0.77	0.004
05. かたい — やわらかい	3.23	3.97	− 0.74	0.012
16. 大きい — 小さい	3.26	2.60	0.66	0.007
10. はやい — おそい	1.71	2.34	− 0.63	0.000
04. 敏感な — 鈍感な	1.94	1.38	0.56	0.037
12. 静かな — 騒がしい	3.39	2.83	0.56	0.093
33. 清潔な — 不潔な	3.97	3.43	0.54	0.071
08. 個性のない — 個性的な	5.20	5.69	− 0.49	0.143
22. 地味な — 派手な	3.71	3.26	0.46	0.088
07. すばやい — のろい	1.60	2.00	− 0.40	0.070
38. 内面的な — 外面的な	4.12	3.74	0.38	0.218
26. 強い — 弱い	2.40	2.06	0.34	0.050
23. 意欲的な — 無気力な	2.83	2.51	0.31	0.275
36. 幸福な — 不幸な	4.60	4.37	0.23	0.608
15. 若い — 老いた	3.29	3.46	− 0.17	0.454
20. 積極的 — 消極的	2.71	2.57	0.14	0.607
03. 不活発な — 活発な	5.83	5.94	− 0.11	0.653
13. 鋭い — 鈍い	1.89	1.97	− 0.09	0.750
14. 病弱な — 元気な	5.63	5.66	− 0.03	0.886

態から対象者の人数が35と少ない事が前提であるが、グループワークを中心とした一週間の授業を経験した結果、多くの受講生のオオカミに対する印象等に大きな変化が生じたことが明らかになった。変化の方向はポジティブで好意的なものが大多数である。やや冗長になることを懼れつつ、有意水準0.000であった25項目を列挙してみる。()内は対になる形容詞である。平均値の差の数字の大きなものから順次示せば、より友好的(敵対的), よい(わるい), 誠実な(不誠実な), 暖かい(冷たい), おおらかな(卑屈な), 情け深い(残忍な), 優しい(厳しい), 立派な(ひどい), かわいい(憎らしい), 正しい(不正な), 理性的な(感情的な), 丸い(角のある), 役立つ(役立たぬ), 安らかな(不安な), のんびりした(せっかちな), 真面目な(不真面目な), 明るい(暗い), 気持ち良い(気持ち悪い), 頼もしい(頼りない), きちんとした(だらしない), 深い(浅い), 物覚えのよい(忘れっぽい), すぐれた(おとった), 慎重な(軽率な), おそい(はやい)方向へと大きく変化している。上記の中の最後の項目が興味深い。よりはやい方がポジティブであるが、一週間の授業の後では寧ろおそくなっている。これはオオカミについての正しい情報を得た結果である。オオカミは実はそれ程足が速くない。オオカミが群れを作りチームワークで逃げ足の速い動物を狩る事と余り足が速くない事とは関係している。カリブーの子どもでも健康な個体であればオオカミよりも足が速いので、オオカミはとことん追いかけない。障害や病気を持っている個体(いきおい子どもが多くなる)を獲物として狙う。このような事をテキストから学んだのであった。

6. 今後の課題

今回は平均値を取り上げたが、一人一人の受講生がどのような変化を辿ったのかを学んだ内容との関連の上で丁寧に跡付けることが次の課題である。

註

- * 1) 後出のテキスト紹介でも解るように、本書はカナダの一生物学者によるドキュメントである。カリブーが激減する原因はオオカミにありと考える政府から、その証拠を挙げるよう命をうけてツンドラ地帯に旅立った著者がそこで見たものは、余計な殺戮を決してしない

潔(いさぎよ)いオオカミの姿であった。寧ろ、ネズミなどの小動物を餌にするなど予想だにしない食性を目の当たりにする。結局カリブーの激減の原因は、賞金目当ての罾猟師と立派な角目当ての商人・観光客たち人間であったことを突き止める。一年間ほどの滞在の中で徐々にオオカミに対する著者の偏見が剥がされて行く様子も良く描かれている。なお本著者は「マックー犬になりたくなかった犬」「霧の中のゴリラ」(ダイアン・フォッシーを描いたもの)などの著書でもあり、軽妙な筆致の持ち主である。

- * 2) 自然保護運動家で俳優でもある英国人ティモシー・ダルトンが野生のオオカミの生態を求めてアメリカとカナダを旅する。最後の場所が今回のテキストの舞台であったカナダ極北のツンドラ地帯。そこで遭遇した白いカナダ極北オオカミは人を恐れず、親オオカミの見守る中で子どもオオカミは主人公の靴を嗅ぐくらいの側まで近づいてくる。驚きをと興奮を隠せぬ主人公。主人公たちの遠吠えに呼応するオオカミたち。冷血で残忍なオオカミの姿はどこにも見つけられない。
- * 3) 女優の大桃美千代が道東を巡る番組。各地の名物を巡り、標茶に至る。その桑原牧場で森林オオカミと極北オオカミと出会う。特に生後3ヶ月ほどの白い極北オオカミの子どもたちとの触れ合いが微笑ましく紹介されている。北海道の本来の自然とオオカミの関わりについての桑原氏の意見も紹介されている。
- * 4) 上記NHKの番組から2年後、福本が桑原牧場を訪れ、氏の主宰するネーチャースクールに参加。その後、狼たちの様子を撮影。白いオオカミもすっかり成長し、森林オオカミと共生している。
- * 5) オオカミは悪役のレッテルを貼られ易いが、我が国では農地の守り神・魔よけとして崇められている。御岳山の周りにはオオカミの頭骨をご神体として大切に祀り・守り続けている家々がある。いざと言うときには、その骨を削って粉薬のようにして病人に飲ませていた。御岳山の南方の桧原村では明治の初めオオカミの乳を飲んで育った子どももいた。奥秩父の三峰神社の鳥居の前に祀られているの

は狢犬ではなくオオカミである。

- * 6) 本来は初日の冒頭実施すべきであった。そのため受講生の中には第1日目の情報と従来までの印象とが混在している場合も少数だが見られた。
- * 7) 最終日の「学習のうと」には2つの課題が用意されている。1つは、テキストに関する学習のまとめで「テキスト・プリント・VTRなどから「あなたが学んだこと」を3点以内に簡潔に述べてください」と言うもの。もう

1つは、本演習の評価テストで「今回の演習を通じて「あなたの裡（うち）にある偏見について気付かされたこと」について述べて下さい」と言うものである。

引用・文献

- 1) 福本 俊：オオカミに関する心理学的研究（1）
— Wolfology 事始め —，日本心理学会第46回総会発表論文集，415（1982）